

令和8年度 第1回高山市環境審議会 議事要旨

日 時 令和8年7月9日（木）午後1時30分～午後3時30分

会 場 高山市役所 4階 特別会議室

出 席	大村 貴之	高山市快適環境づくり市民会議	
	中田 広之	高山市森づくり委員会	
	中村 健史	高山市民憲章推進協議会	
	梶野 明秀	荘川町まちづくり協議会・六厩町内会	
	鴻巣 明久	高山市農業委員会	
	白川 博子	高山商工会議所女性会	
	栗原 真	中部電力パワーグリッド株式会社高山支社	
	脇本 裕司	濃飛乗合自動車株式会社	
	松井 健治	高山市教育研究所・高山市立花里小学校	
	溝口 智子	一般財団法人岐阜県公衆衛生検査センター	
	鈴村 仁孝	ネイチャーサポートシステム	
	小林 正直	環境省自然公園指導員	計12名

事務局	副市長	清水 雅博
	森林・環境政策部長	山腰 勝也
	森林・環境政策参事	倉田 祥彦
	環境政策課長	下野 泰功
	生活環境課長	直井 哲治
	森林政策課長	柚村 守一
	環境政策課環境政策係長	桑山 誠司
	生活環境課生活環境係長	北野 千恵
	生活環境課ごみ処理場建設推進係長	堤 一雄
	生活環境課廃棄物対策係長	松崎 圭佑
	森林政策課林業振興係長	辻 孝司
	環境政策課環境政策係	田中 知博

- 次 第
1. 開 会
 2. 副市長あいさつ
 3. 議 事
 - (1) 令和8年度の主な環境施策について
 - (2) スマートごみ箱の試行運用について
 - (3) 市有林におけるカーボンクレジット制度の取組みについて
 - (4) 脱炭素先行地域づくり事業について
 4. その他
 5. 閉 会

1. 開会

2. 副市長あいさつ

3. 議事

(1) 令和8年度の主な環境施策について

事務局（下野課長）より説明

意見なし

(2) スマートごみ箱の試行運用について

事務局（直井課長）より説明

（清水副市長）

補足しますが、このスマートごみ箱については、観光庁のオーバーツーリズム対策の補助金と、市内のホテル等宿泊者からいただく宿泊税を財源として実施させていただく。

（白川委員）

ごみの分別を間違えて入れてしまった場合はどうなるのか。

（直井課長）

ごみの分別を間違えて入れてしまった場合、ごみを回収した時にしっかりと確認し、適正に処理する。また、どのようにごみが投入されるのか、そのあたりもこの事業の中で検証していきたい。

（中村委員）

近隣の町内会等へお知らせされているのか。

町内にあるごみ収集場所でも、分別されずに置かれ、回収されないという状況がある。悪意でそうになっているとは思いたくないが、分別ができてなくても、数週間後には回収されていく。この試行運用について、設置場所の近隣町内会等にはその趣旨や願いをお知らせし、市民の意識レベルを上げることにつなげる考えはあるか。

（直井課長）

町内会、商店街、町並保存会等へ、順次、案内をさせていただいている。

単にポイ捨て防止のためだけに実証実験をするのではなく、マナーの向上や美化意識の向上なども重要であり、周知をしていきたい。

市民の皆様が利用されているごみステーションにおいても、分別は重要である。そのことについても、今後あわせて取り組んでいきたい。

（中村委員）

古い町並や陣屋などがある「みなみまちづくり協議会」エリアは、インバウンドの多いところではあるが、ごみ箱設置を契機として、町内会は町内会の人々に啓発的な何かができると思う。

我が家の隣はごみ収集場所で、誰が置いていくか分からないが、ごみの分別がされておらず、収集されずにそのままという状況がある。おそらく町内会に入っていない方だと思うが、その

ような方へのアプローチが必要である。市から行ってくださいということではないが、町内会が何らかのアプローチをし、分別回収と一緒にやろうと言っていく、そのタイミングにできることだと思う。ごみ箱が設置されてからの方がよいのかもしれないが、町内会、まちづくり協議会へ積極的に働きかけてほしい。

(直井課長)

本事業の周知については、まだまだ行き届いていないところがある。今後、関係機関を通じて広げていき、広報等でも周知をさせていただく。

市民のごみの分別については、市としても啓発に努めていきたい。実際そういった事例のあるところについては、町内会と相談をしながら啓発などを行っており、今後も取り組んでいきたい。

(鴻巣委員)

今の件で、陣屋の朝市組合とも話をさせていただき、上手に進めていただければと思う。

(直井課長)

陣屋の朝市組合にも話をしながら進めている。運用の中で何かあればしっかりと調整をしながら行っていきたい。

(小林委員)

さきほど副市長からも補足いただいたが、財源について、観光庁のオーバーツーリズム対策支援事業と、宿泊税も導入していくという話があった。これは国からの推奨事業なのか。

また、高山市内はごみ箱のない美しいまちであるが、今後検討されて、市内にこのごみ箱が増えていくのか。今がその検証段階だということは承知しているが、推奨され、積極的な導入なのかを伺いたい。

(清水副市長)

冒頭で申し上げたが、高山市はごみの持ち帰りを推奨しており、街中にごみ箱を設置していなかったが、近年、観光客の増加や、テイクアウトの店が増えてきたこともあり、残念ながらポイ捨てをされる方も散見されるようになった。まちの綺麗さを維持するため、実証実験としてやってみようというのが今回の取り組みである。

この事業は国で推奨しているわけではなく、この事業に対して国の補助事業を活用し、財源としている。また、観光エリアでポイ捨てをする多くは観光客であろうということから、市民が納めた税金ではなく、観光客が納めた宿泊税を充てるのが適当ではないかと考えている。

今後については、まず実証実験という形で行っていくが、その状況を見て、常設のごみ箱を設置すべきなのかを検証し、判断をしていくことになる。

(大村会長)

町並みに馴染むような目立たない色のごみ箱ということだが、観光客がこのごみ箱を知る手段としては何があるのか。また、設置による効果について、観光客から聞き取りができるのか、地域に住んでいる方の反応を求めるのか、そういったゴール地点についてどう考えているのか聞かせていただきたい。

(直井課長)

この事業は観光課とも連携しながら進めている。周知について、観光客への直接的なアピールとしては、例えばデジタルマップに落とし込んで伝えていく、SNSを使いながらの発信し

ていく。間接的なアプローチとしては、観光事業者の方に周知して伝えていただくといった方法を考えている。

検証については、ごみの回収量や分別の状況などを確認するとともに、実際の効果として、ポイ捨ての状況や、関係者にもご意見をいただきながら検証していきたいと考えている。

(中村委員)

先ほど、町内会等の方々と申し上げたのは、今までやってきたことを否定するものではないが、ごみ箱設置をこのように行うので理解してほしいということを言ってほしい。ずっと住んでる人たちのごみ問題に関する意識を今まで以上にバージョンアップしていくような取り組みを、ぜひ町内会等でもやっていこうと言ってほしいので、あえて申し上げた。

否定的なこと話してても始まらないので、前に向かって、ごみ箱設置を通してより広く市民の意識に何かを投じてく方向へ是非取り組んでいただきたいと思っている。

(3) 市有林におけるカーボンクレジット制度の取組みについて

事務局（柚村課長）より説明

(中田委員)

JクレジットのJは日本のJのことで、GクレジットのGは岐阜県のGのことである。経営計画を作ったところがJ、広葉樹中心のところがGということをやっている。森林組合としても、市有林と一緒に取り組みをさせていただいており、現在、認証手続き中ということで、令和8年度のうちには認証されると思うが、今後も市有林中心に市とタイアップして進めさせていただきたい。

(鴻巣委員)

個人の山の地主は山にほとんど興味がなく、私も自分の山をしっかりと把握できていない。山に興味がなくこの事業を進めてもらうことは、大変な苦労があると思う。儲かるところの共有の山は今も活動をしているが、負担になっているだけの共有の山もあるので、個人の山よりも共有の山のところへ話していただくと早く進むのではないかなと思う。

(柚村課長)

個人の山は、多くの同意を得る必要があり、難しいと思っている。このため、高山市有林や共有林といったある程度同意が得られやすいところから着手していきたい。個人の山の方は少し後になるかもしれないが、共有林のようなところから進めていければと思っている。

(大村会長)

イメージとしては、小さい山を持っているからなんとかしてほしいというようなことよりも、市や森林組合の方で、この一帯を実施するので所有者へ協力を求めるようなアプローチの仕方が多くなるということか。

(柚村課長)

そうなっている。個人の山は小さなものが多いので、何百人、何千人といった同意を得ることはなかなか難しい。共有林のようなところからと思っている。

(4) 脱炭素先行地域づくり事業について

事務局（下野課長）より説明

(楽原委員)

先ほどの映像にも弊社の社員が出演しているが、地域のエネルギーを地産地消していく取り組みが具体化されてきたと、映像を見ながら実感させていただいた。高山というのは、森林があって、水があるというイメージと、この脱炭素先行地域の活動が重なり、高山のイメージに合っていると思う。引き続き、アピールをしながら、皆さんのご理解を得ながら進めていければと思っている。

(脇本委員)

本日午前中に CoIU の主催で、こういったものを視察する研修会があり、初めてはおのき平にある小水力発電所と、井上さんがやられているバイオマス発電所を見てきた。この審議会で毎回小水力発電所の進捗状況を聞いていたが、実感は湧かなかった。今日初めて発電所を見させていただき、いろいろなことが分かって大変良かった。例えば、これだけのものを作るのに、地元の方だけではなく、川の漁業権を持ってる人へ丁寧な説明をして理解をいただくといった相当な苦労がある。また、地元の方にとっては、中電さんから電気を買うよりも安い価格で電気が得られる上に、その電気はゼロカーボンの環境に優しいものである。そういったメリットや難しさを肌で知ることができて良かった。

今回このような動画やパンフレットを作っていただき、とてもいいと思った。こういった取り組みを、広く市民の皆様だけでなく、高山市は先行している地域だと思うので、しっかり広めていくことが大事である。

もう1点、新穂高ロープウェイでゼロカーボン運行を開始ということで、私は名古屋鉄道から出向で濃飛バスに来ており、6月から新穂高ロープウェイの非常勤役員も兼務していることから、このように紹介していただき、ありがたく思っている。こうした取り組みを名古屋の方でも、東海交通研究会というところを通してマスコミにも広く周知しているので、我々も広く周知していきたい。

(松井委員)

昨年度、高山市の小中学校の理科教員で、奥飛騨の中尾温泉にある地熱発電所を見学させていただいた。その時の感想でも出てきたが、この高山ゼロカーボンシティの地図に、中尾の地熱発電所は入っていないが、子どもたちに説明するためにも、なぜ入っていないのかを教えてください。

(中村委員)

付け加えたい。市役所が作ろうと思うと、いろいろな支障があって、全部載せることができないということはあると思う。しかし、この動画やパンフレットなど、合わせ技で1本取れるような成果を上げているし、これが高山市の脱炭素社会を目指す取り組みだと誇りに思っている。時代を担う世代の者に、高山市はこんなことに取り組んでいて、僕たちはその町に生まれ育って、その町を自分たちが担っていくんだという思いにさせるようなものをぜひやってほしい。

市民憲章に「こどもを愛し、健やかに育て、夢と誇りをもたせましょう」とあるように、夢と誇りを持ち、大人が取り組んで頑張っているという姿が、子どもなりに捉えられるようなものにしていただきたい。

(下野課長)

地熱については、火山帯の熱源ということで、ポテンシャルを持った大事な再生可能エネルギーを生む資源だと思っている。環境基本計画などにおいては、地熱発電等についても推進をしていくとしている。その一方で、温泉源の枯渇などの心配もあるが、ポテンシャルのあるも

のとして、地熱発電も、ぜひ児童生徒の皆さんに知ってもらい、こういったエネルギーが開発されてることを紹介したいと思っている。

脱炭素先行地域づくり事業では、豊富な水資源と豊富な森林資源という中でピックアップしたものが小水力と木質ではあるが、我々が出前講座等で説明する際には、地域の資源、その中には地熱もあるといった紹介をしていきたいと考えている。

4. その他

・乗鞍岳のライチョウについて

事務局（下野課長）より説明

（小林委員）

7月1日の岐阜新聞「乗鞍のライチョウ最少」を見て驚いた。この記事は、6月30日に松本市で開催した乗鞍のライチョウに関する報告会の内容が記事になっている。

乗鞍は、これまで先人たちが大切にしてきた自然環境の賜物で、ライチョウの生息環境として非常に優秀な場所で、安定した生息数が継続的に見られていた地域である。だいたい150羽から200羽くらい、2019年ぐらいまでは安定した生息数があった。環境省は、生息数の減少が見られる南アルプスや中央アルプスなどに、2014年から保護増殖事業を開始し、乗鞍の個体を保護増殖事業に活用した。その賜物もあり、現在では、中央アルプスでは300羽を超える個体数となった。また、日本中の動物園では、乗鞍から採卵した卵やその子孫たちが見られるようになった。今ではライチョウが5つの動物園で見られるようになり、飼育施設も入れれば、7から8か所で乗鞍由来のライチョウがいるということ、地域の誇りとしてずっと大事にしてきた。

一方で、高山市でも環境保全に取り組まれているが、ライチョウはこの5年間で半減どころかもっと減少している。減少した要因の調査を行っているが、要因は今ひとつはっきりしない。いろんな複合的な要因がある。温暖化による高山帯の縮小、また、少雪化により山に十分な積雪量がないことなどが考えられる。植物の表面を覆っている保護膜が雪に埋まらないことで削られてしまい、枯死する状況が見られた。そういった場所では繁殖しなくなっている。結果、今年の生息なわばり数調査では過去最少の26となった。

岐阜県側では、岐阜大学の楠田先生を代表として、ぎふライチョウ保全研究会が昨年から活動を始めている。乗鞍がこのように危機的な状況になってしまい、ぎふライチョウ保全研究会としては、どのように食い止めて、今後どのように保護施策を行うか、また、皆様にも関係していただいて、ライチョウの問題を考えていくのか。また、減少の主たる要因ではないが、今までいろいろな調査が行われてきたことによる調査圧も、生息に影響を与えていた可能性を排除しきれない。現在、野鳥の会岐阜飛騨ブロックの方々、有志の方々と協力し合いながら、調査圧を排した調査方法を研究し、実際に調査も始めようという動きがある。

高山帯の自然環境というのは、極地の自然環境と似たところがあり、私自身も30年以上乗鞍に住んでいるが、この5年での自然環境の変化のスピードというのは、想像をはるかに超えている。ライチョウの減少も、この5年でここまで減ってしまうのかということが実際に起きている。このような状況を広く市民の方々にも知っていただき、危機感を持つことで、様々な環境施策を、自分のことのように行っていけるのではないかな。

また、環境省と相談しているが、昨今問題になっているニホンジカの高山帯進出について、先日、乗鞍の高山帯でも確認された。昨年、五色ヶ原の森でも問題視されており、今年から対策として捕獲等を始めるということも聞いている。長野県の乗鞍高原側では、一の瀬園地がシカの食害によってかなり植生が変化してきており、もう防鹿柵が張られているという状況がある。乗鞍においても、様々な問題がある中で、50年先までライチョウの生息環境を保全して

いくために何ができるのか、みんなでやっていこうという気運も高まってきている。皆様にも情報共有させていただければと思います、報告した。

(下野課長)

ライチョウの状況について、日本野鳥の会岐阜飛騨ブロックの方々も、とても心配されている。先日、国府町の商業施設で行ったグリーンマーケットというイベントの中で、野鳥の会の皆さんがブースを設け、ライチョウの状況を知っていただく展示をしていただいた。また、8月11日の山の日記念全国大会においても、多くの方々が訪れる機会を活用し、ライチョウの状況について発信をしていきたいと考えている。

(大村会長)

このことについては、いろいろなところで知る機会が増えてくると思う。まずは知ることから始めていければと思うので、お願いしたい。

・第10回「山の日」記念全国大会岐阜 in 飛騨高山について

事務局（下野課長）より説明

(大村会長)

ぜひ周りの方にもお知らせいただき、この大会に参加していただきたい。

それでは、委員の皆様からその他でご意見をいただきたい。

(鈴木委員)

県内全域で植生の調査を行っているが、地味に変化があると感じている。例えば、松枯れは一旦落ち着いていたが、最近、小坂町の方から少しずつ北上している。国道41号を南下して行くと、赤いところが目立ってくることを感じている。調査地へ行っても、赤松がどんどん枯れてきている。また、ニホンジカが北にも来ているということ、そして、ニホンジカにくっついてくる山ヒルの生息域も微妙に変わってきている。そのような地味な変化というものが、何か大きなものに繋がっていくと怖いと感じている。

荘川の山中峠のミズバショウは一時、ニホンジカ、イノシシによって壊滅的な影響を受け、岐阜大学の先生に来ていただき、住民の活動がなされているが、清見の小鳥湿原も、ザゼンソウはもう見えなくなり、ミズバショウも多くなったり少なくなったりと、いろいろな変化が出てきている。また、ツキノワグマについても、私は県内を歩き回っているが、この2年、全く見ていない。これだけ騒がれていて、市内でもクマの出没情報が流れているのに、どういったことが起きてるかと思い、話をさせていただいた。

小さなことも変化が起きている。皆さんもそれぞれの立場に関心を持っていただいたり、何か施策が必要であれば取り上げていただいたり、私のほうでも何かあれば、また話をしたい。

(小林委員)

実は私も今日ここに来る前に、11時までクマと追いかけてっこをしていた。2009年に乗鞍でクマの大きな事故があり、10人の方がケガをされたことがあって、それ以来、関係者でクマ対策マニュアルを作成し、必要な対策を行っている。先ほど鈴木委員から最近クマを見ていないと言われたので驚いた。近年は乗鞍でクマの目撃が続いており、対策を強化している。山小屋においてはクマを誘引する可能性のあるメニューを排除する、具体的にはすき焼きをやめて、匂いを出さないメニューに変えたり、シカを誘引するおそれのある汁を流さないなど、利用者の安全確保に努めている。利用者が事故に巻き込まれないように、今年の7月には、行政の方々にご協力いただいて、パンフレットを手配りして接触事故防止の周知を図ることも計

画している。

(溝口委員)

私は、環境省が管轄する地球温暖化防止活動推進センターの事務局長を務めている。県民の皆さんに温暖化に対する正しい知識を伝え、普及啓発し、脱炭素を進めるという任務がある。最近では中小企業の省エネ支援も行っているが、高山市は省エネ診断数がちょっと少ないということをお伝えしたい。また、環境教育については、県内で小学校が400弱ぐらいあり、その中で今年度55校をやらせていただいているが、高山市は東小学校1校だけであるので、もう少しやらせていただけたらと感じている。市内の企業の方々や、子どもたちの支援に尽力されていると思うが、私たちも何かお手伝いさせていただきたい。

(梶野委員)

昨年は、高山市環境審議会委員をはじめ、市職員の皆さんに荘川の産業廃棄物処分場計画地を視察していただき、環境について一歩進んだと感じている。また、11月には高山市長がはっきりと「産廃は反対」と表明された。また、昨日、富山と飛騨の7漁協が連携してから1年ということで、植樹が行われた。

今まで、どこに建設されるのか知らない人ばかりだったが、のぼり旗などを立てて、絶対に産廃を持ち込ませないという動きになってきた。引き続き、環境審議会委員、市職員の方には、産廃反対を盛り上げていただき、産廃を持ち込ませないようにしていきたいと思っている。

もう1つ、脱炭素の取り組みとして、2050年までに市全域を脱炭素化するという目標が立てられているが、2050年までのビジョンがはっきりわからない。今、小水力発電ということで動きがあるが、綺麗な水の六厩川で小水力発電ができないのか教えていただきたい。

(下野課長)

脱炭素先行地域は、2050年までに市全域ゼロカーボンを目指すもので、脱炭素先行地域づくりの事業としては、令和6年度から5年間、2030年度までにカーボンニュートラルを目指していく、全国のモデルになるようにしていこうというものである。再生可能エネルギーとして小水力発電、木質、地熱というものがあり、問題視されてはいるが太陽光、そういった再生可能エネルギーを総動員していく考えである。化石燃料をなくしていき、自然から生まれる再生可能エネルギーを地域で作っていこう、ゼロカーボンを目指していこうというものになる。そのような形で、環境基本計画に基づき、計画の見直しも含め、道筋をしっかりと考えていきたいと思っている。

荘川については、先行地域の中では、荘川の一色川で話を進めさせていただいている。一色川をモデルにしながら、他の河川についても、地域の理解を得ながら、その可能性について考えていきたい。

5. 閉 会